
未来からの着信

小賀田一丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来からの着信

【NZコード】

N3716A

【作者名】

小賀田一丸

【あらすじ】

主人公竹原裕太は未来の自分からの電話により、自分の身を守つたり、親友の命を守つたり、愛する人を守つていく。

第1話・楽しい学園生活…（前書き）

産まれて初めて小説を書きます（^ ^ ;）
裕太はまだ携帯を持つていらない事にしました。漢字等間違っている
かもしれませんのが何卒楽しく読んでいただければと思いますm（—
—）m

第1話・楽しい学園生活

2004年12月24日東京 僕、竹原裕太は今日過去の自分に電話を掛ける事になる。それはずいぶん前にさかのぼる…

3年前

朝の日射しが僕の顔を照らす。僕はそれと同時に起きた。起きたらすぐに目覚まし時計を見て思つた、

「またやつちやつたよお」

僕は直ぐに布団から出て、階段をかけ降りリビングに入った。

「母さん。何で起こしてくれなかつたの、もうやばいじやん」「さつき起こしたのに起きなかつたじやない。」

こんな会話を済ませ僕はさつさと朝ご飯を食べ、自分の部屋へ戻り制服に着替えて階段をかけ降り、玄関で靴を履いていると後ろから

「裕太、お弁当忘れてるぞ。」

姉ちゃんは弁当を渡してくれた。僕わバッグに弁当を詰めて学校へ走つて行つた。

学校へ走つて行つている途中で前に僕と同じ制服を来た人が歩いていた。誰だ?もう学校の時間、ギリギリなのに余裕で歩いてるよ。と思ひながら走り去つた。

そして、僕はギリギリセーフで遅刻にはならなかつた。自分の席に座つて少し休憩してからきずいた。

「あれ?修也いないな。まあ、いいか

と思ひついたら教室の後ろのドアからゅっくつと修也が入つてきた…が!

「こら!秋元!バレバレだぞ!」

先生は笑いながら言った

「あちや～バレたかあ～まあドンマイ

「まったく。遅刻な！」

と先生が言つと

「はいはい」と言ひながら僕の隣の席に座つた。

「おはよう修也。お前が遅刻なんて珍しいな」

「今日はちょっと寝坊してね。つてか今日裕太、俺の事無視して先に走つて行つたろ」

「つあ！ あれ修也だつたのか！ 余裕そうだつたから修也じゃないと思つたよ」

僕たち二人は笑いながら会話をしている。修也とは小学生からの友達だ。いや、親友と言つてもいいだろう。まあこんな感じであつと いうまに1限目…2限目…3限目…4限目…と過ぎていつた。

「飯だあー！ 飯だあー！」

修也は皆にお昼を伝えるかの様に叫んだ。

「わかつたわかつた。お前のそのテンションは何処から出でるんだかね。」

僕は笑いながら言つた。

「さあ？ それより食堂行くぞー！」

修也は今ご飯の事しか頭に無いのだろう…と思つてゐる間に修やは 食堂へ走つて行つてしまつた。

「おい！ 待てよ！」

僕もその後を走つて食堂へ向かつた。

食堂へ着くと修也はもう「飯を食べていいだ

「はあはあ…置いてくなよ

「わりいわりいお腹がもう我慢出来ないって言つからぞ」

「まあ、いつか。ちょっと飯買ってくる

」と言ひ僕は食堂の売り場に行つた。

「おばちゃんはたぬきうどんを作り始めた。僕はこのあたたかいたぬ

「はい、ちょっと待つてね」

おばちゃんはたぬきうどんを作り始めた。僕はこのあたたかいたぬ

きつどんが一番好きだ。

「はい、お待ち。250円ね」

僕は250円を渡し、たぬきうどんを持つて修也の隣に座った。

「おっ！またたぬきうどんか！裕太！良く飽きないな

「お前だつていつつもたぬきうどんじやんか。」

「飯を食べる時も僕達の会話は絶えない。

「くつたくつた」

僕達は同時に言った。

「はは同じ事言つたな」

修也は笑いながら言った。

「だな。」

食器をおばちゃんに返しながら言った。

キーンコーンカーンコーン

「やつべ！ゆつくり食いすぎた！裕太次の授業何だつけ？」

「理科理科！しかも理科室！」

「理科かよ！走るぞ！」

理科室へ走つて行つていると、トゥルルル！修也の携帯が鳴つた。

「はい、もしもし。…今から行くとこ」

「良いよな携帯」

「まあな、結構便利だしな。着いたぞ」

ガラガラガラ

「お前ら遅いぞ！」

と先生は少し怒つていた。

「すんません」

二人同時に言つた。

「早く席に着いて。」

「はあい」

二人は席に着いた。

「はいじやあ実験の事説明するから…」

と先生が説明をしているとき僕の隣で修也は携帯でゲームをしてい

た。

「こら！秋元！携帯いじるな！」

と言つて先生は修也の携帯をとりあげた。

「まったく！放課後まで没収だ！」

「はあい」

修也はしょんぼりして言つた。

「携帯は便利だが、こんな時もあるんだぜ」

苦笑いをしながら修也は僕に言つた。

第1話・楽しい学園生活…（後書き）

終わりは、修也が携帯を取られてしまいです。いかがだったでしょうか？第2部で裕太に携帯を持たせたいと思います（*^-^*）次も是非読んでくださいね。

第2話・鳴るはやのない携帯（前書き）

やつと2話を作りました。今回はやつと裕太に携帯を持たせる事が出来ました。（＊、＊、＊）今後も皆様の愛読にしていただければなあと思います。

第2話・鳴るはずのない携帯

修也は職員室に携帯を返してもらいに行つた。僕は下駄箱で待つてたら。

「あ！竹原 何してんの？」

佐藤沙希、僕はこの娘が好きだ。

「あ…えっと、修也待ち」

「そつか、じゃあまた明日ね」

そう言つて沙希は帰つて行つた。

「おい！見てたぞ お前沙希の事好きだろ

「そんなんじやねえよ！」

「またまた 嘘が下手だなあ 顔真っ赤」

明らかからかわれてる…

「つるせ」

「いめんじめん 肉まんおじつてやるからよ」

「まじ？じやあコンビニ行こうぜ。」

僕たちはコンビニと向かつた。コンビニは学校からすぐ近くだから便利だ。

「じゃあ祐太、ちょい待つてろよ。」

修也はコンビニに入り肉まんを買つて來た。「ほらよ、肉まん」

「おお さんきゅう」

一人は同時に食べた。

「ん…ん…うまい！」

一人は同時に言つた。

「熱いけどな」

当たり前の事を修也が言つ。

「だな」

一人は肉まんを食べ終えた。

「なあ祐太、今から携帯ショッピング行かない？」

「いいけど

「じゃあ行こう

二人は携帯ショッピングへ向かつた。

「この携帯いいなあ…祐太さ携帯買つてもらえよ?」

「そうだな、今日言ってみよ。」

そんなこんな話しをしていたらもう時間になり一人は家へ帰つた。

ガチャ

「ただいま。」

「おかえり」

やけに機嫌が良い…

「なんかあつた?」

「まあね プレゼントあるのよ」

と言い僕をひっぱりリビングへ連れて行つた。

「あ!携帯だ!これ俺に?」

「そうよ 最近物騒だからねえ~」

「ありがとう!」

さつそく自分の部屋に行き充電をしつつ電源をいれたら。

トゥルルル!トゥルルル!

電話だ…まだ買つたばかりで誰にも教えてないのに…僕は恐る恐る電話に出た。

第2話・鳴るはずのない携帯（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございました。m(ーー)m
裕太の携帯に謎の着信それはいったい誰なのでしょう。次回をお楽しみに

第3話・謎の痛み…（前書き）

二話書くのに結構時間がかかりました
今回でやっと未来からの着信があります 楽しく読んでくれたら嬉しいです

第3話・謎の痛み…

ピッ

「も、もしもし」

『もしもし。びっくりした?』電話の相手は母さんだった。母さんはちゃんと携帯が使えるか確かめたらしい。

僕は携帯を充電し眠りに入った。

朝の日射しが僕の顔を照らす。僕はそれと同時に起きた。時計を見るとまだ時間は余裕がある。

僕は携帯を見て変な事にきづいた。

「0時00分不在着信?非通知か、また母さんかな。」

そう思いリビングへと行った。

「あら今日は早いのね。」

「まあね。それより昨日夜中に電話した?」

「するわけ無いでしょそんな遅くに。」

「そりなんだ…」

「電話でもあつたの?」

「いや…なんでもないよ」

僕はあえてこの謎の着信の事を母さんには言わなかった。

僕は時計を見て時間が遅刻、ギリギリだときづいて急いで家を出て学校へ走つて行つた。

キーンゴーンカーンゴーン

ガラララ

僕は家から全力疾走して、ギリギリ間にあつた。

「おお！我が友よ！今日は遅いの。」

修也はふざけて言った。

「今日はまた寝坊かな～それよりさ携帯買つてもうつわったあー。」

僕は携帯を見せて言った。

「おお！それ新しいやつじやんか。いいな～、アド交換しようぜ

」

僕達はアドレスを交換しあつた。

「それよりさ、佐藤のアド聞かなくていいの。お？」

修也はからかう様に僕に言った。

「うるせえ。いざれ聞くさ」

僕は佐藤沙希の方を向いて言った。

あつといつまに下校の時間になった。僕と修也は部活に入つてないので直ぐに下校した。

僕達は寄り道もせず家へ帰つた。

僕は家へ着いた。

「ただいま

……返答がない…僕はリビングへ向かつた。テーブルの上には「ちょっと会社に呼び出されちゃつたから適当に食べてて」と置き手紙と1000円が置いてあつた。僕はコンビニから弁当を買って来た。弁当を食べ終り自分の部屋に入つた瞬間！

トゥルルル！

携帯が鳴つた。非通知…また母さんだろ？と思ひ電話に出た。

『もしもししー』母さんではなかつた。何処かで聞いた声だつた。

「はい。誰ですか？」

『もしもしーまだ体に異常はないか？！』

「は？間違えじゃないですか？」

『そっか…まだ携帯を買ってもうってあまり時間はたってないみたいだな…』

「あの…どちらまで？」

『悪い。名前言つのは遅れたな。落ちついて聞いてくれよ…俺はな…お前の未来のお前なんだ。』

「え？俺の…未来の…」

僕は何が何だか分からなくなっていた。『ようするに…俺はお前でお前は俺なんだよ！』僕は携帯を落としてしまった。

は？…なに言つてるんだ？までよ…この声俺と似てないか？何だ？

『もしもし！』

何だよ？…最初の体に異常は無いかつて？！

『もしもし…！』

え？俺は今未来の自分と電話してるのか？！

『もしもし…！…どうした！大丈夫か！』

その時！裕太の胸に激痛が！

えっ！あああああ！何だこの痛みは…あああああ…胸が…裂ける様に痛い…

『おい…どうした！大丈夫…か？！』 プツー！ツーッツーッツーッツーッ…

僕はその痛みと共に気を失い眠りに入った。

第3話・謎の痛み…（後書き）

どうでしたか？何か意見があればなんなんと書いて下せー（ へ
^ ）ノ
読んで下さってありがとうございました。四話も読んで下さいね。

第4話・「これが現実（前書き）

第4話…遅くなりました（^_^;）読者の皆わんすこませんでし
た。m（—_—）m

第4話・「これが現実

朝の日射しが僕の顔を照らす。僕はそれと同時に起きた。

「はあ…何だつたんだ…昨日のあの激痛は…夢だつたのか…」

僕は胸に手を当てながら呟いた。僕は昨日の出来事が夢であるか夢でないかである事を確かめる事を思い付いた。

僕は携帯を手にとり着信履歴を見た。

「…………」

「トック！」

僕はこの現実が信じられず、思わず携帯を落としてしまった。

「そんな…そんな…こんな事あるわけがない…ありえない…じゃあ…昨日のあの痛みは…本当にあつたのか…」

僕は念佛の様に呟いているとき、リビングから…

「裕太あーーもう時間よー起きなさいー！」

「つはー…そうだ…もう時間だ…はーーー！今起きるよー！」

僕はこの現実を受けとめる事にした。僕は朝飯を済まし学校へと走つて向かつた。僕は学校へ向かつているとき胸に変な違和感があつた。

「ぐるのか…」

僕はあの激痛が来そうで怖かつた。学校に着くと違和感は消えていた。

「おはよー…」

後ろから修也が僕に言った。

「お…おはよー」

「おこへどつした？元気無いな？びうした？」

修也が心配をうながした。

「じつわ…いや…せつぱい…いや…」「おいい…言いかけたら最後まで言えよ」「じゃあ…絶対に誰にでも言つなんよ」「あんまり言つた。

僕は思つて修也に話した。

「またあ～嘘言つちやつて…」

修也は嘘だと思つてゐる。まあ仕方ないだろ、普通じゃ有り得ない事だから。「まあ嘘だし 騞されてやんの…」

僕は修也に心配をかけたくなかつた。修也は顔を膨らませて先に行つてしまつた。

「まあ何時か言つときが来るかもな…」

僕はそう呟いて修也の後を追つた。「まあ嘘だし 騞されてやんの…」

僕は修也に心配をかけたくなかつた。修也は顔を膨らませて先に行つてしまつた。

「まあ何時か言つときが来るかもな…」

僕はそう呟いて修也の後を追つた。

第4話・「これが現実（後書き）

よんでもくれてありがとうございました（<—>）

第5話・吉田（前書き）

第4話の最後の所がちょっとしたミスで同じ事を書いてしまいました（^_^）今回の始めの文が前回の終わりの文だと思って下さい
m（—）m

さあ今回は裕太の憧れ佐藤からの吉田です

第5話・告白

僕はそう呟いて修也の後を追つた。

その時！…裕太の胸に激痛が走つた！

…ウツ！…アア！僕は声に出さずに耐えた。やつぱり昨日のあの胸の痛みは本当にあつたんだ…痛い…つは！激痛はおさまつた。本の一、三秒の出来事なのに僕には凄く長く感じた。

「はあはあはあ…何だつてんだよ…」

キーンコーンカーコンキーンコーンカーコン

チャイムが鳴つてしまつた。

「ヤバイ！早く行かなきや！」

僕は走つて学校に入つて靴を入れようとしたら。また胸に変な違和感が来た。

「今は来ないでくれ」

そう願つていた。裕太の願いが通じたのか胸に痛みは来なかつた。

学校はあつとこつまに放課後になつた。

「おい！裕太！いい報告があるぞ」

修也はヤケにテンション高めで僕に話しかけてきた。

「ん？どうした？」

「何となあ～佐藤さんがお呼びだよ 何か言いたい事があるらしいよ」

「ええ？…マジで？…」

僕もテンションが上がった。

「マジマジ きっと告白だぞ」

「んなわけあるかよ って何処に要るの？佐藤は？」

「4時に直ぐそこの公園で待ってるって」

「4時つて後2分しかないじゃん…もっ俺行くな！」

「おお！幸運を祈る！」

僕は学校を出て学校の真横の公園へ行つた。佐藤はブランコに座つていた。僕も隣に座つた。そこでやつと佐藤は僕に気がついた。

「ああ…竹原来てたんだ…」

「うん。」

僕達は沈黙してしまつた。この沈黙をやつぶつたのは佐藤だった。

「竹原君、私と付き合つて下さい。」

第5話・告白（後書き）

今回は間違えませんでした…多分（*、ー、*）ワラ

第6話・運命（前書き）

読者の皆さん書くの遅れてしまふませんでした（――・）
これからも読んでください（――・）

トウルリン トウルリン メールだ。

「ん？ 修也か」

『 今日やっぱ告白だつたろ？』

「え～っと…告白…だつた…よつと」

慣れない手付きでメールを返す。

「あ～ご飯食べなきや！」

リビングに行き「ご飯を済ませ部屋に戻るとメールと着信が来てた。

「 ……」

着信は非通知からだつた。

「 また来てるよ…」

とりあえずメールを返し眠りつとしたら…

トウルルル！トウルルル！

「 来た！」

開くと非通知…僕は恐る恐る電話に出た。

「 も…もしもし…」

「 もしもし！まだ大丈夫か？」

「いや…胸に痛みが何度も…」

「もう来たか…」

「はあ…やつぱりあなたは俺なんですか？」

恐る恐る聞いた。

「 そりなんだ！信じて欲しい！そして運命を変えて欲しい…」

「 え？…運命？」

「 もしもし？！おい！」

「 ああ…聞こえる。運命を変えるって…？」

「 ああ…その事なんだけどな…多分無理かも知れないんだが…」

「 無理かもしれない？」

「 そり…俺もお前と同じ歳同じ時間に未来の自分から電話がかかってきた…」

「 てきた…」

「 はあ…」

「俺は」「いつ言われた…修也と沙希を救つてくれと…」「どうゆうことだよ?」

「わからないか?修也と沙希は…事故で死ぬんだ…」「…信じられねえよ…」

「それは分かる…」

「そんなの嫌だぜ?…」「わかつてゐ…だから救つて欲しい!」

「そんなこと出来るはずないじゃんかよ!…いつ何処で死ぬつて分かつて無いんだし!」

「なんのために未来から自分に電話してると思つ?」

「あ!…そつか!…そういうことか…でもなんていうんだり…そんな簡単に時代?を変えられるのか?」

「それは分からぬ…俺は無理だつた…」

「じゃあ無理じやんかよ…」

「いや!…やるだけの事はやつてくれ…頼む…」「分かつてゐよ、修也と沙希を救えるのは俺だけだからな。」

未来の俺は泣きながら言つた。

「ありがと…」

「おう!…ところで…俺の胸の痛みはなんなんだよ?」

「あ…まだ言つてなかつたな…その痛みはな…」

第6話・運命（後書き）

良いことひで終わつましたねえ（>_<）
次回も楽しみにしてください
出来るだけ早く書きます（—；）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3716a/>

未来からの着信

2010年12月14日20時53分発行